

---

# とある未来の分岐点？

マルコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある未来の分岐点？

### 【Nコード】

N5977N

### 【作者名】

マルコ

### 【あらすじ】

『一端覧祭』世界最大の超巨大文化祭の準備が進められる中、当麻はとある少年に出会った。

そして聞かされる彼の願い…「自分を消して欲しい」いつもの様に訳の分からないまま、

事件に巻き込まれていく当麻は消えたいと願う少年を救う事が出来るか！？

様々人物を巻き込んで『一人の少年と当麻の未来』が重なる時物語が始まる！

**爆発するの！？（前書き）**

終わったばかりですが次の作品を載せようと思います。

今回ののは良くあるコメディ系で行きます。

だけど今回ののは前のみたいに早く週に一度のペースで連載できるか分かりません。

## 爆発するの!?

とある日、上条当麻はよくお世話になる病院のベットで当麻は寝ていた。何か何時ものようにとんでもない事件に巻き込まれた訳ではなく、今回の病名はただの食あたりである。やる事もなく、ただ寝転がっていると数回のノックの後にカエル顔の医者が入ってきた。

「君が来たときは、またか…と思ったけど、今回は大した事なくて良かったね」

「あはは…ご迷惑お掛けしました…」

「まったく、なんで食あたり起こすような物を食べたんだい？」

「いやーインデックスが食べた時は、なんともなかったから大丈夫だと思ったんだけど」

「てことは、彼女も同じものを食べたのかい？なんで彼女は平気なんだい？」

カエル顔の医者は顔を歪めながら不思議そうな顔をした。当麻もあきれながらも答えた。

「さあー神様にでも愛されてるんじゃないんですか」

「まっ…一日様子を見たところ問題無さそうだし…もう帰っても大丈夫だよ」

「ああどうも」

「次は気をつけるんだよ…もうすぐ一端覧祭だつていうのに」

はははと苦笑いを浮かべる当麻に背を向けてカエル顔の医者は、部屋から出て行った。

帰宅の許可を出されたので当麻は、帰る支度をし始めた。一日の入院だったが着替えが少しあったのでバックに詰めていると、又してもドアが数回ノックされた。

「ん？はいっ！どうぞ…」

返事を聞いたドアの向こうの人物はドアを開けて中に入ってきた。入ってきた人物は医者なのか白衣を着ていたのだが、その頭はモジャモジャでりおらしくパンチパーマであろうと当麻は思った。そして、顔には今時どこに売っているのか分からない丸いレンズの眼鏡を掛けており、どう見ても怪しいと言えない人物であった。

「何をしているんですか？」

思ったより若い男の声で尋ねてきて、当麻はこんな先生いたっけ？と考えていたが、一先ず質問に答える事にした。

「えっ？いやあ…先生がもう返っていいって」

「帰る！？冗談じゃない！！まだあなたは入院してもらわないと！！」

「えっ！？いやっなんで！？」

「いいから！！ほらっベッドに寝て！！安静にしないと！！」

訳の分からんことを言い出した医者は着替えを詰め込んだバックを適当に投げ捨て、当麻をベッドに無理やり寝かした。

「いやっ！なんですか！？急に！！」

「いいから！安静にしてください！！さもないと…」

「さもないと？」

「えーと…なんか爆発します」

「いや！！何それッ！？何が爆発すんの！！？」

「ですから、爆発します…」

「だから！？どこが！！」

訳の分からないことを言う医者にギャーギャーと叫ぶ当麻だったが、医者が急に当麻に顔を近づけ

「よく考えてみてください！！爆発ですよ！！そしたらどこがなんて関係ないでしょ！！」

「えっ！？いやあ、たしかに」

「最低でも一年！！安静にしていってもらいます！では…」

言い返したかったが、なにやらとてつもない威圧感を感じ当麻は、何も言い返せず、医者は部屋から出て行った。当麻は半ば涙目になりながら呟いた。

「なんなんだよ？一体…爆発って？」

言われた通りに安静にベッドで寝ていると、カエル顔の医者がまたやってきた。半泣き状態でベッドに寝る当麻を見て首を傾げた。

「何をしてるんだい？帰らないのかい？」

「あっ！？先生ッ！俺どうなるんですか！？どこが爆発するんですか！？」

「何を言っているんだい…君は？」

当麻はカエル顔の医者に先ほどのことを説明すると

「そんなことある訳ないだろう…第一そんな先生、私は知らないよ」「ええ！？じゃあ？」

「きつと誰かの悪ふざけだよ…少なくとも私が見る限り異常はないよ」

「そっ…ですか…たくっ！一体誰が？」

考えてみても分からないので、当麻は取りあえず、先ほどのバックを持って病室を後にした。

## 爆発するの！？（後書き）

ここまでです。

正直シリウスよりもコメディの方がやりたかったので

これを書いて結構嬉しいです。

ちなみにこの作品は昔、とあるところで載せましたがあまり評判が  
良くなかったので止めた作品でもあります。

今度は最後まで書きたいと思います

占いて結局…自分に都合いいヤツを信じるよね（前書き）

続きです。

ちなみにこれはオリキャラは一人だけの予定です。

## 占いつて結局…自分に都合いいヤツを信じるよね

退院した次の日、当麻は一端覧祭の準備をする為に学校に向かっていた。その横には派手な修道服を着たインデックスもいる。普段なら学校に行っている間は、家でお留守番なのだが、今は一端覧祭の準備期間はだいたいの学校が午前中授業となり午後からはもっぱら一端覧祭の準備となる。そうなれば、誰が学校にしようと大した問題にならないので、当麻はインデックスを連れて行くことにした。連れて行くと言っても、インデックスが無理やりついて来ただけで当麻も準備の手伝いぐらいしてくれるだろうと思って連れて行くことにした。

「ねえーとうまー、今日準備が終わったら、またみんなでどっか食べに行くの？」

「結局、それが狙いか…言っとくけど今日は準備だけだ」

「なあーんだ」

「ったく…みんな急がしいんだから、手伝いぐらいしろよ」

「任せといてよ！味見なら自信があるんだよ！！」

「うちのクラスは、そんな出し物しねえよ」

能天気だな思いながら歩いていると、コンビ二の横のうす暗い路地に繋がる道の入り口に机と椅子を置いて占いらしき物をやっている。なにやら年寄りが着ていそうな和物の服を着て、口の周りに白い髭のある男が話しかけてきた。

「そこのお兄さん…」

「んっ！？俺？」

「ええ…あなたです…あなたは今日は学校に行かないほうがいい」

「えっ！？なんで！？」

「あなたの今日の運勢は最悪です…このまま行くと大変なことになりますよ」

「ええ！！マジですか！！」

突然の予言に驚く当麻であったが、会話を聞いていたインデックスがムムツと顔が強張り占い師に詰め寄った。

「ちょっと！アナタっ！！」

「えっ！？あっ…はい」

「一体何の根拠があつてそんな事言つての！！」

「えっ！？根拠って？」

「だから一体どういう占いをやってるの！？日本のもの！？それとも中国、インドとかアジア系のもの！？それかヨーロッパとかのもので占ってるの！？」

「えっとー…」

急にテンションの上がったインデックスに占い師も当麻も戸惑ったが、インデックスの正体を知っている当麻はおそらく、膨大な魔術の知識を持っているインデックスにとってはどうやって占っているのが気になるのだろう考えたが、取りあえずこんな所で魔術知識を暴露するわけにはいかないので

「インデックス落ち着けよ…この人は、俺が不幸にならないようにと親切に…」

「別に当麻の不幸なんて今に始まった事じゃないだよ！！」

「あっ…たしかに」

正論を言うインデックスの意見に納得してしまった当麻を見た占い師は当麻に詰め寄った。

「いえいえ！！今日のあなたの運勢は、過去最悪です！！今すぐ家に帰って下さい！！」

「だっかっらっ！一体どういう根拠でええ！！」

よっぽど頭にきたのか、突然占い師に服に掴みかかり問い詰め始めたので、占い師は驚いてバタバタと抵抗している。それを見ていると、どうも、可哀そうになってしまい取りあえずインデックスを占い師から引き剥がそうとインデックスと占い師の間に入ったが、中々インデックスが離れないのでかなり力を入れてインデックスを占い師から離れた。しかし、勢いがありすぎた為かドタンッ！！と後ろにインデックスと一緒に倒れてしまった。

「痛つてえっ！！たく！！何してんだよ！！」

「だつてえっ」

「んっ？それなんだ？」

見るとインデックスの手にある白い毛の塊があった。占い師の方を見てみると占い師の顔から白い髭がなくなつて、なにやら見た事がある顔が出てきた。当麻は考えたなにやら昨日ぐらに見た事がある。

そう、なんだかよくよく考えてみれば昨日も同じよう事があった気がする。

「あっ！？お前昨日のー！！」

「しっ！しまった！！」

「てめえー！昨日といい今日といい！！一体何の恨みがあるって言うんだ！？」

「いやっ！そんなつもりはっ！！私は、あなたの為に……」

「なにが俺の為だ！！訳の分かんねえ！嫌がらせしやがって！！」

一発殴ろうかとも思ったが、いちいち相手にするのも面倒なのでさっさとその場を離れる事に決めた。

占い師をほったらかして歩いていくと、その占い師が着ていた服が邪魔だったのか、それを脱ぎ始めて中から、普通の若者が着そうなジーンズとトレーナーという格好になった。どうやら、先ほどの占い師の格好は、上から羽織っただけだったようで先ほどの年寄りのイメージと違い。普通の若者、おそらくは当麻と同じ年ぐらいに見える。少年は当麻のあとを追って話しかけてきた。

「待つてくださいー！！騙した事は誤りますー！でも！あなたに学校に行かされると困るんですー！！」

「なんだよ！何が困るんだよ！？」

「いやっ…だつて…学校に行く…」

「なんだよ！？邪魔ばっかしやがつて」

無視して行こうとすると、前から良く知るバカの知り合いの声があった。

「おーい、かみやーん」

「んっ！ああ、土御門に青髪か」

「にゃー、今日も授業さっさと終らせて、一端覧祭の準備に取り掛かるうぜい」

「ホンマ午前中授業は、楽やな…つて…だれや？その後ろにおるの？」

「ああ気にしなくていい！ただの不審者だ…」

「いやっ！だから僕の話…」

「なんやカミヤン！女子だけでは飽き足らず、ついに男子ともフラグを立てるようになったんやな」

「黙れ！青髪！！」

などと馬鹿な掛け合いをしていたが当麻にとってはこの謎の人物を無視するきっかけが出来たので、内心は安心してた。その後も馬鹿な掛け合いを続けていると、

「とうま!! あれ!!」

インデックスの声が聞こえたので見てみると、インデックスが道路を指差して驚いていた。道路を見ると、一匹の子猫が道路の真ん中に飛び出していた。そして、なぜこつも完璧にタイミングが合うのかトラックが近づいてきて、あと数秒で子猫が轢かれそうになっていた。

「なっ!!? クソっ!!」

当麻は、もはや反射としか言えない反応速度で、即座に道路に飛び出し子猫のもとへと走った。すぐに子猫のもとに着いたは、いいが、トラックは当麻の目の前まで迫っていた。

「とうま!!」

「カミヤン!!」

友達の声が聞こえる中、目の前に迫るトラックを目にして、

（ダメだ!!）

と諦めた時、先ほどの少年が当麻に向かって走ってきた。そして、当麻は聞いた聞き間違えではなく。確かに少年は叫んだ。

「父さん!!」



占いて結局…自分に都合いいヤツを信じるよね（後書き）

まあこれでもいいと言う話か分かってきたと思います。

でも私はこういう単純なものが結構好きです。

出来れば、私の好きなギャグ系を増やし楽しい話にしようと思います。

ではまた今度

普段から絶対に助けるって言うよりも助けないって言うておきながら助ける方が短いという理由もありますがギャグはなんだか書きやすい。  
と言う訳で話目です

普段から絶対に助けるって言うよりも助けないって言うておきながら助ける方が

謎の少年は当麻に飛びつき当麻と共に横に飛び、当麻は最悪の事態を逃れることができた。

「とうま!!大丈夫!?!」

「ああ!なんとか…」

道路の反対側から声をかけるインデックスによるよると立ちあがり答えると自分を助けてくれた少年を見た。

「その…ありがとうな」

「あつ!いえ…別に大したことは…」

妙な沈黙が続いているところに、インデックス、青髪、土御門が道路を渡って当麻たちの所に来た。

「にゃー!今のは危なかったぜい」

「ホンマやなーしかもあのトラック止まりもせんと行ってもた」  
「無事でよかったんだよ!」

「ああ」

みんなを心配させたことは申しわけないと思うが、それ以前に気になっっていることがあった。が

「いやー君ホンマに勇氣あんな〜俺やったらカミヤンなんかの為にあんなことできへんでえー」

「えっ!そんな…褒められるようなことは…」

「にやー！まったくだぜい…カミヤんなんかの為に命投げ出すなら…俺は喜んでカミヤん命を捧げるぜよ」

「てめえーら…すげえーヒドイこと言ってるん理解してるのか!？」

あまりに薄情な友達にツツコミを入れてみると、当麻は少年の方を向いて先ほどの事について聞こうと思った。

「なあ…お前…さっき」

「ッ!?! すいません!! 失礼しますっ!!」

突然そう言つと、少年は一気に走りだしてどこかへ行ってしまった。

「カミヤん…さっきのあれどどういう意味ぜよ？」

青髪、インデックスが全速力で走り去る少年に夢中になっていると小声で土御門が尋ねてきた。

「…俺の方が知りたいよ…お前は？何か情報入ってないのか？」

「いいや…特にこれと言つて魔術師が入ったみたいな情報は…」

「そうか…」

「何者ぜよ…あいつ…」

「はあー知りたくない気もするんだよね」

当麻はうんざりしながら呟いた。

なぜなら、こういう訳の分からない奴が出る時は大抵上条当麻は面倒な事に巻き込まれるからである。

**普段から絶対に助けるって言うよりも助けないって言うておきながら助ける方が**

短かったです、次にはもう場面が変わるのでここで区切ります。

やっぱり焼き肉って偉大だよね（前書き）

短いとはいえ、一日で4話も投稿できるとは

当麻VSローマ・学園をやった時は考えられないスピードです。

やっぱり俺はホノボノした話しが合ってるな

そんな訳で4話行きま〜す

やっぱり焼き肉って偉大だよね

数時間後、当麻は学校の授業が終わってみんなが一端覧祭の準備をしている中、屋上に向かっていった。

理由は先ほど外で待つインデックスを呼びに行くために下駄箱に言ったところ、

当麻の靴と一緒に一通の手紙が置いてあった。

「インデックスさんは預かっています。助けたければ屋上に来てください」

分かりやすい内容であった。そして、すぐに誰が書いたかもすぐに分かった。

とにかく、無視するわけにもいかなないので当麻は屋上へと向かった。予測は出来ていたが、やはり面倒な事になるようだと思えて身に染みた当麻であったが意を決し屋上に出る扉を開けた。

「ねーねー手伝ったら焼き肉に連れてってくれるの？」

「ええ、うまくいったら御馳走します…あっ!？」

「何?…あっ!」

ドアを開けた先には特に何か縛られている訳でもないインデックスと朝見た少年がいた。

どうせ悪人のような行動を取るなら悪人らしく、動いたらコイツの命はない!くらいのことをしてくれればいいものをあまりの悪人とは言い難い状況にバタンツ!と当麻はドアを閉めた。どうするべきか考え、最終的にきつと今のは見間違いだと言う結論に至り、も

う一度ドアを開けることにした。

「来ましたね！」

「わーとうまー助けてー！！（棒読み）」

ボタン…またドアを閉めた。

見るに堪えないとはこういう事を言うのか、と上条当麻は学習することが出来た。

「いやっ！待って！！確かにグダグダでしたけど！！」

ドアの向こうから聞こえる必死の声に仕方なくもう一度ドアを開けて、取りあえず言いたいことを言うことにした。

「……さて…えーまずそうだな…準備をしておけって言うことが一点…次に棒読み演技をどうにかしろ

…そして最後に、インデックス…焼き肉に釣られるな！」

「…だつてえ」

いじけているような声を出してはいるが焼き肉につられ面倒事に手を貸すインデックスを一々心配しようと思わなかった。

というより先ほどの様子から見て心配する必要もなさそうだった。

ムーっと不貞腐れるインデックスをさて置き、当麻は謎の少年と向かい合った。

「またお前か…」

「おとなしく帰ってもらえませんか？」

「だからなんで帰らないといけないんだよ？理由を言え！理由を！」

「理由は言えません…ただ、おとなしく帰ってもらえないなら…力ずくで…」

人質であるインデックスが役には立ちそうにないので、少年はどうやら戦うらしい

当麻もここまでいろいろされて黙っているわけにもいかない、右手を握りしめて一気に突っ込もうとしていた所にバコンッ！と突如謎の物体が謎の少年の頭に激突した。

何が起きたか分からなかったがバタリ倒れる少年の近くにコロコロ転がる物を見て理解できた。

少年にぶつかった物は野球のボールであった。そして、なぜここに飛んできたのか説明するかのように遠くの運動場の方から微かに声が聞こえてきた。

『見ろ！！俺の特大ホームラン！！』

『ばか！！あんなとこまで飛ばして誰が取りに行くんだよ！？』

『あれ！？おい！あれ上条じゃね？』

『あつ！ホントだ…ラッキー！おい上条！ボール取ってくれ！！』

何やら親しげに声を掛けてくる生徒達だが記憶を失った当麻にとってはほぼ初対面状態であった。しかし、当麻は面倒事にならなかったこと名前も知らない彼らに感謝しつつ、届かないながらもボールを運動場向かって投げた。

「お前の代わりに言っというてやるよ…『不幸だ……』」

気を失う少年に取りあえず当麻は優しい目をして呟いた。

やっぱり焼き肉って偉大だよね（後書き）

まだあまりキャラは出てませんが、  
次回から色々出そうと思います。

優しさって時には痛いものなんだよね（前書き）

ちょっと気付いた事

いつもサブタイを悩みすぎてる気がする

これも当麻VSローマ・学園の影響か

もっとふざけたものしようと思いました。

優しさって時には痛いものなんだよね

「でっ…どういうことだ…上条!」

(こっちが聞きたい…)

当麻は、オデコDXを発動させた吹寄に正座をさせられている。聞きたい事は、

たった今、当麻が連れてきた縄でグルグルに縛られた少年は誰なのか、そして、なんで拘束されているのか、

拘束している理由は単純である。未遂に終わったが知り合いのインデックスを誘拐し、さらに当麻に脅迫もしてきたからである。

ただ、自分からついて行ったインデックスにも問題はあるし、何よりこんな状態で本当に焼き肉に連れて行ってくれるのかと

不安になって少年の傍にいるインデックスを見ると、それらの事件に対する怒りもほとんど失われてしまった。

だが、かと言って厄介事が終わった訳ではない。なぜなら、目の前にはさつさと「一端覧祭」の準備をしたいのに何やら厄介ごとを持つてきた当麻をぶちのめしたいのである。吹寄の姿があるからである。

様々な危機を乗り越えてきた当麻には、吹寄の放つ嫌な殺気(すでに何人が殺しているのではないかと感じさせるオーラ)を感じ取っていた。

周りのクラスメイトも巻き添いを恐れ、当麻、吹寄から離れているが、そこに

「にゃー!にしても飛んできたボールに当たるなんて…まるでカミヤン見たいぜヨ!」

「ホンマやな」

場を和ませる天才3バカの残り2人が現れた。

「こりやもしかしたら本当にカミヤん息子かもしれないにゃー！」  
「えっ！？それどういうことや？」

「にゃーそーいや青髪は気づいてなかったかもしれないが…コイツ、朝力ミヤんに向かって『父さん』って呼んだんだぜい！」

「何やて！？ほなアレか！時をかける少女とか、あつ！この場合は少年か…まあ取りあえずそんな感じのファンタスティック少年って事かいな！？」

「にゃーでもどうせなら、悪者を倒しに未来から来た時空警察のメイド課長の方が良かったにゃー！！」

「いやいや…ここはセクシースーツで敵を倒すバニーちゃんの方が！！！！」

2人は吹寄が出すオーラを無視するがごとく訳の分からない話をしていた。

そのあまりの空気の読めなささに吹寄の先ほどのオーラ何処かへ行ってしまった。

土御門、青髪はふざけて話しているが実は当麻自身も彼の正体について少し考えていたが…一番初めに浮かんだ考えはすぐさま削除した。なぜなら

「土御門、青髪…悪かったわ…私が殴りすぎちゃったから、こんなになっちゃったのね…本当にごめんなさい」

こうなるからである。今までに見たことのないくらい吹寄に優しくされた土御門と青髪は

「止めてください、そんなに優しくしないで下さい」

標準語に治るくらいショックであった。

「バカもここまで来ると心配になってくるわね」

吹寄は呆れると言つよりは憐れむような目で土御門と青髪を見つめた。

「にゃー！！そこまで言われたら意地でも証明してやるにゃー！！」  
「証明？」

土御門はあたりを見渡すと一端覧祭の準備で使われたであろうノコギリを持ってきた当麻の前に立った。

「おい！…土御門どうするつもりだ？」

「簡単だにゃー！これでカミヤんを適当に少しだけ切って、この少年が消えたらカミヤんの子って事になるぜよ！」

「いやっ待て！それは『少し』じゃないっ！！その少年以前に俺の大事なものが失われる！！」

「わがままだニャー！なら……」

そう言つて、次に土御門は金槌を持ってきた（笑顔で）。すぐにどうしたいか分かったので

「だが断るっ！！」

「ならっ！断ることを俺が断る！！…あつ間違えた…断るにゃー！！」

「おいコラ！今のは俺に死ぬ以外の選択肢がないことにツツコムベきか！？それともキヤラを忘れてたことにツツコムベきかどっちだ！？」



優しさって時には痛いものなんだよね（後書き）

今回はいつきに5話も出来ました  
が次回からはどうなるか分かりません  
多分こういう短いのを何本も書いていくと思います

嘘をつくのは簡単だ。けど人をだますのは難しい。（前書き）

めんどいから展開はパパッと勧めました。

嘘をつくのは簡単だ。けど人をだますのは難しい。

「うっうん」

「おっ！目を覚ましたにゃー！」

「ここは…」

少年は、辺りを見渡した後、自分が縛られているのを確認して溜息をついた。

「…くそっ…なんでこう不幸な偶然が…」

「早速ですが！！質問です！！あなたは何年後から来たんだにゃー」

「……おいイキナリかよ」

当麻は、目覚めていきなり確信もないをこと尋ねた土御門に今度は優しくツツコミを入れた。

（つーか、そう簡単に答えるわけ…）

「ナツナツナンノコトダカワカリマセン」

「…ウソヘター！！！！」

カタコトにカタコトで返してしまうほど驚いた。

（…ここまで来ると…逆に疑えない）

「にゃー！その慌てえよう！やっぱり未来から来たんだにゃー！！」

「……………」

少年は、黙り込んでしまったがその態度で土御門の考えが事実であることを物語っていた。

「まったく…そんな突拍子もない事を信じると?」

だが、吹寄が信じていないと言った目で少年と土御門を見てきた。

「信じるか信じないかは、勝手だにゃー…でも本当に未来から来たなら、やっぱり気になるぜい」

「…僕は嘘が下手ですし、もう変に話をややこしくしたくないので未来から来たことは否定はしません…けど未来の情報は言いませんよ」

「なら仕方ないにゃー」

土御門は、クラスの外に居る男子に向かい

「モテナイ諸君!今から憎むべき旗男を『ヒモなしバンジー』の刑に処する!手伝いた者は前に出る!」

6〜7人の男子無言でクラスに入ってくると当麻の手や足を掴んで窓へと向かった。

どうやら、この少年が未来云々から来たことより上条当麻抹殺には興味があるらしい。

「えっ!いやちょっと待って!!何ホンキ!?本気と書いてマジ!」

「……上条に死を…上条に死を…上条に死を……」

「怖いから!!」

何かのカルト集団の様になっている中、土御門はお気楽そうに手を振っていた。

「カミヤん…良い旅を」

「土御門！！テメエ！！！」

あと少しで窓から落とされそうになったときに、少年が慌てて声を出した。

「まっ！！待ってください！！！」

その言葉を聞いた土御門は、男子たちを止めるように指示をした。

「話す気になったようだにゃー」

「……あらがっても無駄のようですし………少しだけなら」

嘘をつくのは簡単だ。けど人をだますのは難しい。(後書き)

もっとギャグを入れたいんですが

まあ…今回はこの程度で

次回はもう少し多く入れたいですね。

カゲで友達のことを褒めてる奴が一番信用できる（前書き）

展開が早いけど、どうか気にしないで下さい

というわけで、出来たので第7話いきます

## カゲで友達のことを褒めてる奴が一番信用できる

少年はどうやら話す気になってくれたらしいが彼の話を聞こうとする人はあまりいなくクラス全体を使っても邪魔になるだけなので、吹寄が当麻、土御門、インデックスを部屋の端の方へと追いやった。そして、他のクラスメイトも「一端覧祭」の準備に取り掛かり、周りは釘を板に打ち付ける音や材木を切る音で騒がしくなった。クラスメイトの中には「あいつらはいいいのか？」と吹寄に尋ねる者もいたが、「もう好きなように生きればいい」と若干諦め気味に言った。確かにいきなり未来から来たとかいわれて信じる者なんてなかなかいないだろう。土御門も未来の情報が欲しいわけではない、ただ学園都市を影で暗躍する上で彼の正体が気になっただけである。当麻も彼が何者なのか気になっていただけで、未来から来たなんてこと実際はまったく信じていない。

「でっ…お前は何年後から来たぜよ？」

「22年後」

「カミヤんを『父さん』って呼んだってことは…」

「…はい…息子です」

少年のカミングアウトに当麻はただ啞然とした。いきなり『未来から来たあなたの子供です』と言われて、『はい、そうですか』と納得できる人間はいないだろう

「…急に息子だって…言われても」

「おいおい…かわいい息子の言う事が信じられないのかにやー？」

「いきなりそう言われて納得できる奴がいるなら連れてこい…そし

て俺を納得させる！」

当麻はもつともなツツコミを入れたが、土御門は無視して続ける。

「にゃー！でも気になることはいつぱいあるにゃー！！！」

「だから…未来の事は喋りませんって！！」

「お堅いなにゃー！そうにゃ！俺がどうなっているか知らんぜよ！？」

「えっ！？土御門さんですよー…あんまり父さんから聞いたことはないけど…」

「なんでにゃー！高校時代の話くらい聞いたことあるぜよ？」

「いや…その…あんまり…父さんと…その…」

少年は突然言いにくそうにもゴモゴを喋り出したが、突然ハツと何かを思い出したような顔をした。

「あっ！！もしかして昔父さんと一緒に3バカって言われてた！？」

「にゃー！！ちよつと覚え方酷いけどそれにゃー！！」

「ああ！！聞いたことあります…父さんが言っていました！」

「ほー！なんて！？」

「もし会う事があつたら常に敬語を使って他人のふりをしろって…」  
「なんでだあああああ！！！！！」

叫ぶ土御門と対象に当麻はプツ！とふき出した。そして、縛られる少年の頭に手を置いて、

「なるほど…確かにこいつは俺の子かもな…」

「信用するポイントそこオツ！？」

周りの準備の音をかき消すほどの盛り上がりになっていき、その空

気に入らなくなったのか  
突然青髪が入り込んできた。

「ああもう！！なんかそんな騒がれるとワイも気になるやんけ！！  
俺のことはどうや！！」

「えーと…青髪…あつ！！それならよく聞きました！！」

「へーなんて！？」

「あいつに会う事だけは絶対に避ける…無理なら即座に逃げろって」  
「なんでだあああああ！！！！」

「おい…関西弁忘れてるぞ」

土御門に続いて青髪が絶叫するなか、周りにいたクラスメイト達も  
少し気になって聞き耳を立ててたのか、それを聞いて当麻と同じく  
笑ってる者もいた。あの吹寄せえもプルプルと笑いを堪えていた。  
なんだかバカにされている雰囲気になったので土御門は話題を変える  
ことにした。

「ああもう！！もうそんなことはいいにやー！！なんで君はこの世  
界にきたにやー！！！！」

土御門の言葉に少年はビクッ！と震えた。

「僕は…」

少年は言葉を発した後、少し黙り暫くすると当麻を見つめて告げた。

「僕は自分の存在を消すためにここに来たんです」

カゲで友達のことを褒めてる奴が一番信用できる（後書き）

とりあえずここまでです。

なんかまだあんまりギャグがない気がするな

子供は親に似るって言うけど、あれ子供が親の真似してるだけだから（前書き）

書いたのですが、少し急いで書いたのでミスがあるかもしれません  
できれば気にしないで下さい  
そんな訳で第8話いきます

子供は親に似るって言うけど、あれ子供が親の真似してるだけだから

先ほどまでの穏やかな空気と打って変わり、クラスの者はみな啞然としてしまった。

「自分を消しにつて…」

「それってどういうことなん!？」

何時になく真剣な顔で土御門と青髪が尋ねた。しかし、少年は顔色を変えず淡々と続けた。

「簡単に言つと…父さんと母さんを結ばれないようにする為に来たんです」

暫く、クラスを静寂が包んだがそれを遮るように土御門が尋ねる。

「お前の母さんつて…誰ぜよ？」

「言えません」

土御門に続くように今度は青髪が尋ねる。

「結ばれないようにするつて…そないなことしたらお前はん…」

「ええ…僕は消えてなくなるでしょう」

クラスで一端覧祭の準備をしていたクラスメイトも話の重さを悟ったのか、みんな静まり返っていた。  
事を中心人物でもある上条当麻も話を聞いてるうちに少年の本気の

気持ちが伝わってきて、何をどうすればいいのかと、ほぼ混乱にも近い状態になっていた。だがそれも仕方がないだろう、突然未来から子供が来たと思えば、今度は自分を消したいだなんて頭の整理がつかなくて当然である。取りあえず当麻は混乱する頭を落ち使える為と色々情報を得る為に質問をすることにした。

「この時代を選んだのは？」

「……………ここが父さんと母さんが結ばれるきっかけになったところだからです」

「なるほど…だから、病院やら街角やらで色々邪魔してたって訳か……」

少年は言葉を出さずにコクリと頷いた。

「なんで自分を消したいんだ？」

少年は暫く下を見つめたままだったが、不意にポツリと呟く。

「母さんが…辛そうだからです」

「えっ!？」

少年の言葉に当麻は思わずドキツとしてしまった。少年の様子を見る限り嘘をついてるようにも見えなず、少年がそこまで思いつめるほどのことを少年の母にしてしまったのかと、当麻は未来の事とは言え気の毒な事をしたように感じた。

「俺が…その…何かしたのか？」

「父さんの性格…いや性分の問題ですよ」

少年は下を俯きながら語り出した。

「父さんは何時も何かに巻き込まれては人助けの為に家を飛び出していくし、そして何日も家を空けて置くわ、行った先では何人もの女性とお近づきになってバレンタイン、クリスマスって信じられなくらいのお客さん（女性）がくるし、バレンタインの時だけで言ったら毎年毎年、信じられなう数のチョコ送られてくるし、一体どれだけ食べばいいんだって、俺を糖尿病にでもしたいのかってツッコミたくなるくらい死ぬほどチョコ食わされるわ…クリスマスには父さんに色仕掛けの為にミスカサントとかいっぱいくるから、ホントマジであれ…目のやり場に困るから、思春期の俺に際どいものを見せてんじゃねーよ…ホント腹立つ…」

途中からはほぼ呪文のように愚痴を唱えていた。

「取りあえず辛いんだな…」

答えたのは当麻ではなく土御門であった。先を越された当麻は取りあえず落ち着いて

「いや…だからって自分を消そうなんて」

「あつすいません今のは僕個人の愚痴です」

少年は我に返ったように真面目な顔をして当麻を見つめた。

「僕は…父さんが家にいなかったり、他の女性と仲良くしたりしてるのを見て寂しそうにする母を見たくないんです」

「……自分の存在を消してまで…お母さんを不幸にしたいくないってことか？」

当麻は半ば呆れ気味だった、どれだけな母親思い、いやマザコンだ

ろと口に出さずに心の中で思った。

だが、そんな事を忘れさせるようなことを少年はポツリと呟いた。

「それに……一人ぐらい奥さんが減ったって……」

「んっ？どういう意味だ？」

突然の意味の不明な言葉に当麻は何か寒気のようなものがした

「いや、だって……父さん、バツ8だから」

その瞬間、当麻は時間が止まったような気がした。だが後に悟る、これは走馬灯だったのだらうと。当麻があたりを見渡すと近くにいた土御門、青髪、インデックスにその奥にはクラスの代表とも言わんばかりに吹寄が立ち尽くしていた。

「おいコラ……カミちゃんお前はそんなに女を乗り換えたのか？」

「より取り見取りか！？こら！！！」

「とっくま」

「貴様アア……」

クラス中、いや今は学校中の殺意が当麻に向かっていているのではないかと思うほどの痛い、視線と殺気をその身に浴びていた。

「いやいや……ちょっと待ってくださいよ……そんな……吹寄さんまで……あなたこんな身も蓋もない事を信じられないと言ったばかりじゃないですか！？」

「たしかにな……だが何故だか、信じられるような気がしてきた！！」

じりじりと近づいてくる彼らを当麻はなんとか落ち着かせようとしたが

「あーちなみに僕は3人目の奥さんの4人目の子供です」

「上条おおおおおおお！！！！！」

「にややややあああああああ！！！！」

少年は火に油を注いだ。少年の言葉を合図にインデックスは当麻の頭に噛み付き、その当麻の頭を吹寄がヘッドロックし、土御門と青髪はどこからか持ってきたノコギリとトンカチを当麻に向け不気味な笑顔を向けていた。そんな中、吹寄はこちらをジッと見つめる少年に気付き、当麻に技を決めながら少年に話しかけた。

「どうした？君の望み通り父親を消し去ってあげよう！！！」

吹寄の言葉に少年はビクツ！とし少し挙動不審になりながら慌てて答える。

「いやっ！あの〜え〜っと、あれです！吹寄さんって結構美人なんだな〜って思ってただけです！！」

少年としてはこの場を和ませる為に言ったのだろうが、それを言った瞬間、

また暫くの間、時間が止まった。そして、吹寄は当麻のヘッドロックをバツ！と解いて

「このなんだか苛立たい感じ！！やっぱりお前は上条の子だアアアアア！！！！」

今度は吹寄は標的を謎の少年へと変え、少年に襲いかかった。

「なんでこうなるのオオオオ！?!?!」

少年は吹寄にグーパンチで襲われ、それを避けようとジタバタすると不意に縛られていたロープが緩んでいる事に気付く少年は乱暴にそれを取り外し、慌てて今まさに襲われている当麻の手を握った。

「こっちです！」

手を握られた当麻はほぼ反射のように握った少年に従い教室のドアに向かって同時に逃げし、上条達を抹殺しようとするクラスメイト達を押し避け、廊下に抜け出すと2人は同時に叫んだ。

「不幸だ~~~~~!!!!!!」

子供は親に似るって言うけど、あれ子供が親の真似してるだけだから（後書き）

とりあえずここまでですが、急いで書いたのでまたその内書きなおすつもりです。

だけど、おかしな～なんだか誰か書いてない気がする…

なんかこう黒髪で長髪で巫女属性な…まいつか、もういねえだろ

おいおい（笑）

嫌よ嫌よも好きの内って言うけどさ、あれって相手がMに限るんじゃない？（前書

出来ましたので第9話行きます

嫌よ嫌よ好きの内って言うけどさ、あれって相手がMに限るんじゃない？

追手を振り切り何とか地獄と言う名の学校から脱出した当麻とその子供である少年は、今は大して人のいない公園のベンチで休んでいた。

「はあゝ死ぬかと思つた…」

「なんで僕まで…」

背もたれに寄りかかりながら顔を上に向けている当麻とは対照的に隣の少年は顔を下に向け息を整えていた。

その不幸そうな姿を見ると、どうも自分の重なると思えるのは錯覚だろうか、

「あれは…お前が悪い」

「えっ！？いや！普通に褒めただけだと思うけど…！」

「ああ言うの嫌いなんだよ、吹寄は…他の奴らもお前にせいで悪乗りするし」

「悪乗り…あれが？」

少年は信じられないと言つた目当麻を見つめた。

確かについ先ほどの本当に死ぬかと思つた状況をただ悪乗りなどで済ませるのはどう考えても無理だろう

「あいつら、皆ああ言うのが大好きなんだよ…まあ俺は堪つたものじゃないけど…」

「なんていうか……すごいですね」

漸くたつて落ち着いてきたのか、当麻と少年の息はもう乱れていなかった。

「はぁ…でっ？お前はどうすんだ？」

「えっ？」

「また色々と邪魔すんのか？…まあどっちにしろ俺は暫くは学校に行けないしな」

「それはそれで安心しますよ…またあの集団の中に戻るなんて言ったら一緒に行く勇氣ありませんし」

少年は苦笑いをしていたがどこか安心した表情だった。

「なあ…お前ホントはどうしたいんだ？」

当麻の言葉に少年はえっ！？といった顔をした。

「何がです？」

「お前…本当は自分が消えたいなんて思っていないんじゃないのか？」

「……………」

「お母さんの為だかなんだか知らないけど…お前が消えて解決する事なのか？」

少年は当麻から目を逸らして黙ったまま前を見つめた。そして、何かを言おうと口を動かそうとすると

「あんたッ！何してんの？」

突然、一人の少女が喋りかけてきた。少年にとっては初対面であり、彼の父にとってはよく知る顔だった。

「よお…御坂か」

「あんた…今はどこの学校も一端覧祭の準備で忙しいって言うのにこんな所でデートって…」

呆れた顔の御坂だった。少年を見て意外そうな顔をした。

「あれ？男の子！？珍しいわね…あんたが男友達と一緒にいるなんて…」

「何だよ？そのいつも女の子といるみたいない方は？」

「別に間違っていないでしょ？」

「御坂…さん」

突然、名前を呼ばれ思わず少年の方に視線が言った。御坂は少し考えながら

「え…と…誰？」

「…ん」とツ…俺の息子…」

先ほど逃げる為に使った体力の為に当麻はもう一々言い訳を考えるのもいやになって御坂に対して投げやりに言った。それを聞いた御坂はもちろん

「はあ…？」

当たり前の反応を取った。もうほとんど分かっていたので当麻は気にせず面倒くさそうに続けた。

「いやーホントなんだよ22年後から俺の息子でさ…こいつがギャーギャーうるさいからここで二人っきりで話し合ってたわけよ」

「あんた…バカにしてんの？」

御坂は当然の対応と取った。バカにされてると思った御坂は当麻に詰め寄ろうとしたが

「ああ！！…ビリビリの事か！！」

突然大声を出した少年に御坂はピクツと反応して少年の方を向いた。それに遅れて当麻が少年の方を向いて尋ねた。

「なんだお前、御坂のこと知ってんのか？」

「ええ…父さんよく話してくれましたよ…よく自分を殺そうと襲ってきたビリビリ女のこと」

「こっ殺そうと！？」

御坂は声が裏返るくらい驚いた。しかし、当麻大して気にせず続けた。

「へーそれはよく聞いたのか？」

「ええ…それはよくわりと、何度も殺されかけて…あいつと会うというも憂鬱になったって」

当麻と少年の話を聞いて御坂は口をパクパクさせながら啞然としていた。

「あーやつぱりー」

「話してる時の父さんも辛そうでしたから…でも全然普通のかわいい子じゃないですか」

「そりゃ大人しくしてる分にはいいよ…でもお前会ったび会ったび電撃を浴びせられてみなさいよ」

もうあの姿も鬼にしか見えないって…」

「へー当たり前だけど今の父さんも同じこと言うんだ……父さんもあんなのと付き合ったら酷い目に合うだろうって言ってた」

二人は黙々と会話を続けたが、ふと御坂に眼をやると何やら下を向く御坂からバチバチと激しく電気が漏れ出している事に気付き、耳を傾けてみると何やらボソボソと呟いていた。

「何よ…そんなに…私が嫌いなわけ…そんな子まで使って…迷惑な言えばいいじゃない…近寄って欲しくないなら…そう言えればいいじゃない」

「いや…あの…御坂さん？」

当麻が恐る恐る声をかけると御坂は下げていた顔をバツと上げ、その眼に溜まった涙を二人に見せつけた。

「ウワアアアアアアアアアン！！！！」

泣いているとも叫んでもいるとも怒っているともとれる声をあげて全身から信じられないほどの電気を発した。

「ギャー！！！何なんですか！？父さん！！あの人突然！？」

「よく分かんねえけど、たまに訳分かんない事になるんだよ！！」

大量に発生する電撃の中から流れ弾のように当麻達に向かってくる電撃を当麻は右手でかき消しながら走りだしそれに続くように少年も走り出した。

「不幸だー！！！！」

本日2回目の意気投合であった。

嫌よ嫌よも好きの内って言うけどさ、あれって相手がMに限るんじゃない？（後書

と言う訳でたぶんこれからいろんなキャラを出して

謎の少年と関わらせていきたいと思います。

そんなこんなで今回はここまでです。

モテモテの主人公ってなんだが当たり前前の様な気がしてきた（前書き）

出来たので載せます

モテモテの主人公ってなんだが当たり前のような気がしてきた

公園に居られなくなった二人は今度はトボトボと街をぶらついていった。

電撃のせいで少しばかり服が焦げている二人を周りの人たちは以上に見えたのか（結局のところ異常である）誰も近づこうともしなかった。

「くそ…なんで今日ばかりこんな目に」

「なんで僕まで…」

「オメーがいろいろ言っただからだろ！」

「なっ！？父さんだって頷いてたじゃないですか！？」

見た目は同い年だが実際には父と子、これくらいの口げんかは普通なのかもしれないが

実際にやっている本人達を目の前にとこれもまた異常である。誰も声をかけないとたかを括っていたが、

「あれ？…上条当麻？」

急に後ろから声をかけられ振り向くと一人のクワガタのような髪型の男が立っていた。

「あれ！？建宮！？」

「やつぱりそうか！！おーい！女教皇！五和！みんなもこっち！！」

建宮が振り向いて後ろに向かって声をかけると数名の男女がぞろぞ

ると近づいてきた。

そして、その中でも当麻がよく知る二人が近づいて話しかけてきた。

「久しぶりですね…上条当麻」

「どうも！ご無沙汰してます！！」

話しかけてきたのは建宮の上司である神裂火織と同じ天草式の同僚である五和であった。

「神裂！五和も！それにみんなも！！どうして！？」

「なにを言ってるんです？あなたが招待したのでしょうか？」

「一端覧祭ってすごいお祭りがあるから来てくれって！」

二人の言葉に当麻は少し考えた。確かにイギリスで働く彼らと他の何人かの世話になった人々に手紙で招待した覚えがあった。

「あーそういえば…確かに言ったけど、一端覧祭にはまだ5日あるぞ」

「長い休みを取れたので今朝こっちに…今はあなたに挨拶に行くとともに皆で少し見て回ってたところですよ」

「そうか…」

当麻が平たんな返しをしていると神裂が当麻の隣にいる少年に気付いた。

「あのそちらの方は？クラスメイトですか？」

神裂は当麻の隣にいる少年が当麻と同じく少し焦げているのを見て友達と思ったのか、何気ない感じで尋ねてきた。もう当たり前のような質問なので当麻は藪から棒に答える

「あー俺の息子」

「「「「はあ？」」「」」」

本日まだ2回目だがもはやお馴染と言ってもいいであろう反応、当麻は慣れたように続けた。

「いやー22年後から来た俺の息子でさー今一緒に不幸な目にあつたところから逃げ出してたところなんだよ…」

どうせ、信じられないだろうと当麻は、ほばやけくそ状態だった。が

「学園都市とはそんなことも出来るのですか!？」

「あれ!？」

予想外の反応に当麻は思わず声を出した。

「学園都市は科学が進んでいるとは言え!まさか時の壁を乗り越えられるなんて!」

「さすが学園都市よな!!!」

「いやっ…あの」

あまりの予想外っぷりに当麻は思わずたじろんでしまい、何とか天草式を落ち着かせようとしたが

「あなたは誰の子なんですか!？」

あまりの興味津津の五和に圧倒され当麻は言葉を挟むタイミングを失った。

「いえ…あの…そういうことはあまり言えないんですが…」

少年も目を輝かせる五和に戸惑いながらも自分が取るべき対応を取ったが、

「じゃあれですよね！？私の子と言う可能性もない訳ではないんですね！？」

五和は少年の手を握り、圧倒的存在感で詰め寄ってきた。

「いや…少なくともあなたの子ではないですよ…」

本来言っている事かは分からないが、あまりに期待の眼差しを向け迫る五和に押され少年は思わず本当の事を言ってしまった。

「そうですか……」

急に落ち込んだ五和を見て、何か思うところがあったのか慌てながら少年は五和に声をかけた。

「あつ！でも父さんバツ8ですから！！もしかしたらあなたもその中にいるかもしれませんよ！！」

当麻はこいつはまた余計な事を…と思い、殴って叱ろうと思ったが

「ほんとですか……！！？！？！？」

再び、いや先ほど以上に目をキラキラさせる五和を前にして、なかなか面倒な事になりそうだ…そう感じた当麻は

「ああーもう！！お前は事を複雑にするからもう喋んな！！！」

そう言っただけで、その身にあるすべての力を使ってその場から離脱した。

「おいおい…バツ8ってどんだけだよ…なあ五和…」

逃げ去る当麻達を見送りながら建宮は五和に語りかけたが、

「私がいつ結婚するかは分かりませんが大丈夫です、例え捨てられても子供達は私が責任を持って育てます！」

五和は当麻達がいなくなった事にも気付かずに両手を頬にあてながら腰をくねくねと動かしていた（なんだか動くたびにハートが出ている気もする）。そんな、五和を見た天草式はアックアと戦った時以上にの息を合わせながら同時に呟いた。

「『駄目だコイツ何とかしないと…』」

モテモテの主人公ってなんだが当たり前のような気がしてきた（後書き）

えゝすいませんでした！！！！

五和ファンの皆さん、

なんかキヤラくずれしてる気がします

まあ所詮は素人なので気にしないで下さい。

アクセラレータには悪いけど、やっぱりアクセロレータってうまくい事言っなあ

短いですが出来たので載せます。

今回は一方通行登場

まっ…すぐ終わっちゃうけど

アクセラレータには悪いけど、やっぱりアクセロリータってうまい事言っなあ……

10分近く歩き続けただろうか、当麻は少年が離れないように首元の襟を掴んでいると不意に少年が立ち止った。振り返ると少年が疲れたように肩で息をしていた。考えてみれば今日一日でどれだけ全力疾走したのだろう、当麻自身も疲れていたものでこれ以上少年を引っ張ろうとするのはやめた。

「はあ……まったく次から次へとお前は……」

「……………すいません」

さっきみたいに言い返してくるかと思ったが少年はあっさり謝ってきたので少し拍子抜けしてしまった。

「もうお前未来の事、なんも喋んな……全部面倒な事になりそうな気がする」

「僕もそう思うので……もう止めときます」

少年も漸く悟ったのか、ウンザリしながら答えた。

「あアン？何してんだオメエ？」

「またも、声をかけられ嫌な予感がしたがほっておく訳にもいかず当麻は振り向いてみると、これまた珍しい人物がそこにいた。」

「一方通行！まさかお前にまで会うとは…」

「当麻に声をかけたのは白い白髪が目立つ学園都市最強の能力者『一方通行』であった。因縁と言ってもいい関係である二人だが、そのまま戦いを行わないところを見る限りある程度、互いに理解し合っており少しはマシな関係になっていることが窺える。」

「アクセラ…レータ…」

「一方通行の名を聞いた少年は何を不思議そうに呟いた。」

「なんだ？知らないのか？」

「いえ……誰かから似たような言葉を…確か…アク…アク」

「何かを思い出せそうだと同じ言葉を繰り返して呟いていると」

「おい誰だコイツ？」

それを見て、奇妙に思えたのか一方通行が尋ねてきた。

「あーただのクラスメイトだ…」

もう説明するのもやになったのか当麻は嘘をつくことにし、そのまま事なきを得ようとしたが、

「ああ！！思い出した！子供好きの『アクセロリータ』！！！！」

少年がそう言った瞬間、時が止まった。そして、その後確かに何か  
がプツンツ！と切れる音がしたのは気のせいか、そんな、事を確か  
める間もないまま

「……………テメエ……………誰のことだアアアア！！！！コラアアアア！！！！」

めったなことでは彼の背中から出てこない黒い翼がドバツ！と勢い  
よく出るところから察するにどうやらめったな事が起こったらしい。

「ダアアアア！！！！もう！！イヤアアアア！！！！」

本日4回目の全力疾走…

アクセラレータには悪いけど、やっぱりアクセロリータってうまい事言っなあ

短いな

そう思いながらもなかなか会話を増やすことが出来ませんでした。

やっぱり一方通行はボケをさせずらい

## 男はドンツと構えてる（前書き）

小説とは不思議なもので書いてるうちに別のものアイデアが出てきて  
今度はそれを書きたくしてしまうがなくなる

しかし今は目の前の作品を仕上げることに集中します。  
それでは12話いきまゝす

## 男はドンツと構えてる

先ほど登場した、今まで当麻の会ったミーシャ、風斬、そして堕天使エロメイドこと神裂火織並みに印象に残るトンでも「天使」

天使とはかけ離れているが、一方通行から逃げ延びた二人は先ほど御坂美琴と会った公園とは別の公園に行きつき、そこで見つけたベソチに

ただ黙って座っていた。

「……………すみません」

不意に少年が下を向いたまま当麻に言った。

「何がだよ……」

「いや……いろいろと……」

少年の顔は見れないがおそらく申し訳なさそうな顔をしているだろうと感じた。

「ホント疲れるよ……」

文句を言うような口調で言ったが、その後、空を見上げながら呟いた。

「まあでも…アレなんじゃね？子供に振り回されるのも親の仕事なんじゃね？」

当麻がそう言うと少年は当麻の顔を啞然とした様子で見つめた。そ

してまた

「あれ？上条か？」

誰かが当麻を呼ぶ声がしてきた。当麻はまた何か面倒な事になるのではと思ったが声をかけた人物をみて少し落ち着いた。

「おう…浜面に滝壺か…こんな所で何してんだ？」

「滝壺がある程度出歩けるようになってな…ちよつとした散歩だよ」

「ああ…病院この近くだったのか…体調はいいのか？滝壺…」

「うん…もう大丈夫…」

ピンクのジャージを着た大人しそうな少女、滝壺は答えた。今まであった人達の中で一番何事も起こりそうもない二人会って、当麻が少し安心してしていると

「浜面さんに滝壺さん！！」

当麻の隣にいた少年は急に声を上げ浜面に近付いた。

「うわああ！！すごい！！浜面さん僕と同じくらいの背だ！小さな」

急に浜面の前に来たと思ったら、右手で自分と浜面の身長を比べだした。

「えつと…はあ」

まったく身に覚えのないアカの他人に浜面がたじろんでいると

「ははっ！！滝壺さんも！！」

今度は少年は滝壺の前に立って、滝壺の顔をまじまじと見つめた。

「やっぱり未来とは違うな…なんだか綺麗っていうよりかわいいて感じだな」

今まで未来に影響がどうのこうのと言っていたわりに饒舌に話した少年に当麻が啞然としていると

「かわいい…」

どこか照れているような表情のまま呟く滝壺を目に少し焦った様子で浜面が大声で尋ねた。

「なっ！？おい上条！何なんだ！？コイツ」

「え…っと、俺の息子」

「……………はあ？」

今度は当たり前の反応が返ってきたが、もう慣れてしまった当麻は浜面に説明するようりも先に少年に尋ねる事を優先した。

「お前…浜面のことは知ってんのか？」

「ええ…よくお二人にはお世話になりましたから…」

少年は笑顔で答えながら、浜面達と向かい合った。

「浜面さんには昔喧嘩の仕方教えてもらった事もあります」

少年にとっての過去とは自分達にとっての未来であるので今の浜面

にとつては勿論身に覚えのない事であるが

今だ状況が掴めていない浜面はこんな少年に何かを教えたつけ？と言った顔になった。だが、そのような考えも吹っ飛ぶような事を少年が言いだした。

「それ二人の子供とも仲良く遊んで！………っあ」

少年は漸く色々べらべらと喋りすぎたことに気付いた。

「なっ…何言つてんだ！？子供オオ！？」

理解するのに時間がかかったためであろうか浜面は叫ぶのに数秒かった。

「ああ！！またお前は！！ほら行くぞ！！じゃあな！浜面！滝壺！」

面倒なことになるのでは。と考えると同時に当麻はこれ以上少年が余計な事を言うのを恐れ、また首元の襟を掴んで引っ張ってどこかへ走って行った。

（上条の野郎！…一体何だつてんだ！？訳のわかんねえこと言つて勝手に消えやがって！！なんか変な空気になつてるじゃねーか！？）

残された浜面は言葉に出さないが、なんだか滝壺の出す何時もと違う雰囲気を感じどうしようかと頭をフルに回転させていると

「ねえ…はまづら」

少しパニックッてる浜面を知ってか知らずか今まで黙っていた滝壺がいつものおっとりとした口調で話しかけてきた。

（落ち着け！！浜面仕上！！こういう時こそ男はドン！と構えておくべきなんだ！！）

心の中の会議でどうするか決めた浜面は

「どうした？滝壺…」

おそらく絹旗がいたら「超キモイ」と一刀両断されそうな笑顔を向け、決してうるたえず驚かない事を誓い滝壺に尋ねると

「はまづら……………子供は何人欲しい？」

「それずっと考えたのおー！？！？」

僅かに頬を赤らめながら尋ねる滝壺に浜面の決意はホンの1秒ほどで砕け散り、浜面の叫び（ツツコミ）が辺りに響いた。

## 男はドンツと構えてる（後書き）

以上です。色々考えた結果これはあと4、5話程度で終わります。

「当麻VSローマ・学園」に比べればあ短いですが書いていてとても楽しい作品です。

あと少しですがどうぞよろしくお願いします。

えっ！？あまりにうまくいきすぎてる？だって作り話だもん（前書き）

題名通りです

では13話いきます

えっ！？あまりにうまくいきすぎてる？だって作り話だもん

今日一日で一体どれだけ走ったのだろう、そう疑問に思えるほど走りまわった二人は

日も沈みかけて、あまり人通りのない道をトボトボと歩いていた。

「はあ…結局今日一日走って終わっちゃったぞ」

「なんか…すいません」

「なんかじゃねえーよ…完璧にお前が悪いんだからちゃんと謝れ…」

二人は先ほどから似たような事を繰り返して会話し続けていると、不意に少年が立ち止った。

「どうした？」

「いや…なんだか…何やってんだろって思ってた」

少年はため息交じりに呟いた。

「色々覚悟したつもりで来たのに…実際には…」

「さっきも聞いたけどさ…ホントにお前は消えたいのか？」

「……消えたいとか、そういう事じゃなくて…僕なんかいない方がいいじゃないかって…」

「誰がそう言ったんだ？お前の母さんか？」

「……いや…だれがって訳じゃ…」

「さっきも言ったけど、きっとそれってお前が消えて解決する事じゃねえと思っぞ…」

少年は当麻の言葉に何も言い返せないままいると、突然二人の前に2メートル近くある巨大な物体がズシンッ！と落ちてきた。しかもそれは一つではなく2つ3つ次々に現れ、最終的には5つ目まで現れてきた。事態が掴めない二人だったが、落ちてきた物をじっくりと見つめそれが手や足、頭らしき物も見え、少し考えた後それロボットである事に気付いた。ロボットは二人をジッと見つめるとその機械で出来た腕を二人向かって向け、その手から何かを放った。放ったものは二人の間を針を通すかのように抜けて二人から10メートル以上離れた所に飛んでいくと、それはドカン！と言う爆音と爆風と共に爆発した。二人は反射的にロボット達がいる所から逆の方に逃げるように走り出した。

「なんなんですか！？あれ！？」

「わからねえ！！とにかく逃げるぞ！！」

~~~~~

土御門元春はとある窓のないビルを訪れていた。ビルの中は暗く部屋の中央には赤い液体に満たされる円筒があり、土御門はその前に来ると怒鳴った。

「おい！どういいうつもりだ！？あんな街中に『駆動鎧』の部隊を放つなんて！？」

「君は知っているだろう？「幻想殺（イマジンブレイカ）」と一緒にいる少年さ」

「あの上条当麻の息子とか名乗ってる奴か！？」

「今の学園都市には未来と過去をつなぐ技術などないから、信憑性

には欠けるが…その少年自体は確かにこの街には存在しない」

「本当に未来から来たとしても？」

「分からん…だが、妙な干渉は計画に影響がでるかもしれん…だから彼には」

「上条当麻はどうなる！？」

「安心しろ…彼を死なせるようなことはしない」

~~~~~

二人は人気のない、廃ビルの多い町を走っていた。そこを走った理由も先ほど見せつけられた攻撃の影響である。今、二人を追っているロボットのような集団は先ほど人氣が少ないとは言え街中で爆発物を使ってきた。どういう経緯で二人を攻撃してくるか分からないが、とても人気の多い街中を通れば攻撃を躊躇してくれるとは思えなかった。そのため二人は出来るだけ人氣のない廃ビルが並ぶ通りをひたすら走っていた。

（たくツ！！何だってんだ！！クラスメイト達に御坂に一方通行、さらにこいつらってどれだけ殺されかければいいんだ！？）

当麻の頭の中は完全にパニックになっていたが、何を言っても始まらない、いやもうすでに始まっていることをどうしようもない事を悟り、ただ、黙って逃げる事に専念した。相手はすごいゴツイ印象を与えるロボットであつたが、その動きは非常に早く二人は先ほどから何度も先回りをされ、その度に薄暗い狭い路地に何回も入っていくことになった。狭い路地なのでロボットは入ってくる事は出来ず、何とか巻く事は出来たが突然、一体のロボットがその腕から先

ほど二人に見せた攻撃を今度は二人の近くに向かって打ち、その爆発で二人を吹き飛ばした。

「ワアア！！！」

「ダアアア！！！」

当麻と少年は爆風で壁に叩きつけられた。当麻は意識を失いかけたが、彼の前に倒れる少年にゆっくりと近づくロボット見て、それが何をしようとしているか悟り、当麻は近くに落ちていた鉄パイプを拾って、ロボットに近づきその頭めがけ鉄パイプを振り下ろした。かなり力を込めたが当麻の攻撃はガキンツ！と鈍い音を立て、その腕に鈍い振動を伝えるだけだった。ロボットは殴りかかった当麻に腕使ってなぎ払うように吹き飛ばした。

「ガアア！！！」

再び壁に叩きつけられたが、少年に向かってその腕の銃を向けるのを見た当麻はすぐに立ち上がって少年のもとに行くと覆いかぶさるように盾になった。

「父さん！！！」

『ドイテクダサイ、アナタヘノ、コウゲキメイレイハダサレテイマセン』

「ふざけんなア！！！」

機械電子音でたんと述べられる言葉に当麻は怒りを露わにし大声をだした。

「逃げて父さん！！攻撃しないって言ってるんだ！！早く逃げて！！！」

「ふざけんな!!」

当麻は先ほど見つけた鉄パイプをロボットに向けて構えた。

「なんで？父さん…あなたは何時も…何時も」

「くだらねえ事聞くんじゃないやねえよ！お前がピンチだからに決まってるだろ!？」

少年はハッ!とした顔で自分の前に立つ当麻を見つめた。そして、当麻は続ける。

「第一…自分の子供がピンチなんだ!!親がガキの為に命を張るのにそれ以上の理由はいらねえ!!」

決して逃げない当麻に少年は感謝のような感動の気持ちで胸がいっぱいになったが、そんな二人をあぜ笑うように二人に向かって銃を向けた。今の当麻の手には決してこの事態を覆すようなとんでもない力がある訳でない。だが決して当麻は逃げようとしなかった。そして二人が死を覚悟した、その時

「見つけたぞオオオ!!!!」

救いの神、いや破壊神は突然現れる。

「さんざん捜させやがってエエエ…」

『アッ!アクセラレータ!？』

『ナンデ!コンナヤツガ!？』

「ごちゃごちゃうるせえ!!!さっさと殺らせるオオオ!!!」

ギヤアアア!!と言う叫び声となんだがドゴ!バゴ!といろんな物

が壊される音が響く戦場を前に

「……………」

「………まあ………なんだ………あきらめなきゃどうにかなるもんだ………」

あまりに出来すぎた話に啞然としながら取りあえず当麻は場を和ませようとした。

えっ！？あまりにうまくいきすぎてる？だって作り話だもん（後書き）

いろいろ迷ったのですがここはグダグダやっても自分じゃ面白い戦いを書けないと思ったのでサクッと終わらせました。前にも書きましたが今自分の頭の中では新しい話が出来ていて、それを書きたくて仕方ありません。

だから、ここさっさと終わらせることにしました。

女を口説く時はシチュエーションを大事にしろ（前書き）

正直前ははなんだか書きずらかった。

でも今回はずつと頭の中で考えていた話だったので

スラスラ書くことが出来ました。

そんな訳で14話行きます。

## 女を口説く時はシチュエーションを大事にしる

当麻達に襲いかかってきたロボット達は一方通行相手に5分も戦い続けると言う快挙をやったのけ

その隙に当麻は少年を背負って全速力でその場から離脱した。本日これが最後である事を願い当麻はひたすら走り、最終的に昼に御坂に会った公園へと戻ってきた。

「だあ！！もう無理！！！！これ以上走れん！！」

背負った少年をベンチに下ろすと当麻も倒れるようにベンチに座った。

「大丈夫？父さん……」

「これを見て大丈夫に見えるなら眼科行け！！」

最早はあはあなどと言う息の仕方ではなく、ぜいぜいと乾いた息をする当麻を見つめ少年はフツと笑みを漏らした。

「父さん……その……ありがとう」

「ああ？礼だったらアクセラレータに言え……恨みって言うのも意外と買っとくべきだな……」

「いや……そうじゃなくて……ほらなんて言うか……見捨てないでくれて……」

「ああ？別に大したことねえよ……それに当たり前だろ……お前は……俺の子なんだから」

「どうやら無事のような力ミやん……！！」

もう人気のない暗い公園の奥から当麻の良く知る男が現れた。

「土御門！！」

「アクセラレータも役に立つもんだ」

「お前か？あいつ呼んだの……」

「いや……居場所教えただけで顔色変えて飛んで言っただけよ」

「どんだけ恨んでんだよ……と呆れてはいるが結果的に助けてくれたアクセラレータに心の底から感謝していると、土御門が少年の方を見て喋り出した。

「さてと少年……上はお前を不法侵入として扱ってるぜい……さっさと家なり未来なり帰って方がいいぜよ」

「そういうことらしいぜ……死にたくなかったらさっさと帰れ」

「そうしますよ……」

「……何だか素直だな」

「いえ……なんだか、死にそうな目にあって漸く自分は消えたくないんだって知る事が出来ました」

少年の皮肉ですねと言いたげな顔を見て、当麻は

「なあ……もうお前消えたいなんて思わないよな？」

「……………えっ！？……多分」

「はあ……じゃあこうしようぜ……お前は自分がある意味があるのかって言っただけだよな？」

「……………はい」

「だったらこう言うのじゃ駄目か？俺は……お前に生きていて欲しいんだ」

「えっ！？」

「未来の俺がお前をどうしたいかなんて俺は知らねえけどさ……少な

くとも今の俺はお前に死んで欲しくないんだよ」

「父さん……」

「お前がそんなに思いつめるまで、ほったらかしにしておいて……自分勝手な親だとは思っけどさ……やっぱり自分の子供が「消えたい」なんて言うのは……俺は見たくねえーんだよ」

そう言っただけで少年を見ながら笑う当麻に少年もつられるように笑みをこぼした。

「色々大変な目に会ったけど……でもここに来てよかったです……こんな風に父さんとじっくり話した事なかったから」

「何ぜよそれ？その割になんか恨んでるような感じだったぜい」

「あーそれは」

少年は何かを思い出したのか先ほどの笑顔とは違う苦笑いを浮かべながら

「だって……僕がついてないのは父さんの遺伝だって……母さんが」

「あー……」

「おい！なんだその納得みたいな相づちは！？」

当麻が若干の憐れみとやっぱりと言っているような目を向ける土御門にツツコミを入れていると、突然少年が立ちあがった。

「じゃあ……僕行きますね」

「ああ……つーか未来ってどうやって帰るんだ？」

「別にそんな大それた物で帰る訳にはありません……でも帰るところ見られる訳にはいけないので……お二人はここにいてください」

「分かった」

「にやーさっさと帰った方がいいぜい……アクセラレータに見つかっ

たら厄介になるぜよ」

少年はハハッと笑いながら立ち去ろうとする少年を

「なあおい！」

当麻が突然呼びとめ、近づいた

「お前の母さんに伝えてほしい事があるんだけど…」  
「えっ!？」

当麻は少年の肩に手を置くと口を耳に近づけ何かを呟いた。

「なっ!どうして分かったんですか!？」

驚く少年に当麻は頭をかきながら面倒くさそうに答える

「うゝん…そうだな天草式の連中に会ったぐらいからかな…お前…  
顔の輪郭とか髪型は俺に似てるけど…その眼…母さんに似てるな」  
「…なんだばれてたんですか…」  
「ああ…まあ何だ!自身はねえけど、ちゃんとお前の母さんを幸せ  
にするよ」

まっすぐに少年を見つめて語る当麻に少年は一言だけ告げた。

「ありがとう…父さん」

それだけ言うと少年は暗い公園の奥へと走って行き、ホンの数秒立つとその姿は闇に消え見えなくなった。

少年は先ほどまでいた暗い公園とは違う、もっと明るく日の光が指す、木が生い茂る広い公園の様な所に立っていた。

「見つけた」

ボーッと立っていると不意に後ろから聞き覚えのある声に振り向くとそこに彼の良く知る人物が立っていた。

「母さん…」

「まったくどこ行ってたのよ？」

「えーっと…ちょっと父さんに会おうかと…」

少年の言葉に母はピクツと反応したが、どうやらあまり本気にしていないらしい。まるであしらうような口調で彼に尋ねる。

「そう…会えた？」

「うん…まあね……そうだ！忘れる前に父さんから伝言！」

「伝言？」

「そつ…使いもしないのにあんまり通販で買い物するな！だって…」

なっ！？と驚く母の顔を少年は先ほど父に見せたものと同じ笑顔をしながら見つめた。

~~~~~

まだ人も全然来ていない学校に当麻はわざわざ朝早くから訪れていた。人気のない廊下を通って教室に行き、ドアを開けるとまだ誰もいないと思っていた教室に一人の少女の姿があった。

「よお…朝っぱらからご苦労だな…」

「なんだ…貴様が……」

教室にいたのは吹寄制理、学校などで行われるイベントでは進んで運営委員なるというイベント大好き少女であり、今も誰も来ていない教室で一人、黙々と準備を進めていた。

「まったくどっかの誰かさんのおかげで準備が少し遅れてしまっ  
たな」

「……誰でしょうね…ホント」

まだ色々と言いたい事はあるそうだが、どうやら吹寄はそんな事よりも準備に取り掛かりたいらしい、入ってきた当麻を無視し再び何やら飾り付けの準備をし始めた。

「手伝うぞ」

何気なく言ったつもりだったが、吹寄は意外というよりは驚いたような顔で当麻を見つめた。

「何時も邪魔ばかりの貴様がどついう風の吹きまわしだ？」

「まあ…たまにはいいだろ」

当麻は自分の机に鞆を置くと、吹寄の飾り付け準備に加わった。

「なあ吹寄…ちょっと俺のお願い聞いてくれないか？」  
「やだ」

即答だった。最早ここまで早いとツツコムことさせ忘れさせるくらい  
の早さであった。

「……そう言うなよ…あの「一生のお願い」使うから」  
「ジュースは奢らんぞ」

「「一生のお願い」使ってもジュースも飲めないんだ…俺…まあ大  
した事じゃねえんだよ…あの…今から俺が言う事に絶対に怒らない  
って約束してくれ」

「いや、それだけの為に「一生のお願い」を使うなんて貴様何を言  
うつもりだ？」

「え…っと…お前を口説く」

「……………はあ？」

「いや…違うな、その前にシチュエーションから作らないとな…」

吹寄は事態を飲み込めなかった為、当麻が一番恐れた殴りかかると  
いう事にはならなかった。というよりそこまで思考が回っていなか  
った。そんな吹寄に構わず当麻は続ける。

「あゝ取りあえず吹寄、一端覧祭が終わったら一緒に遊園地行かな  
いか？」

## 女を口説く時はシチュエーションを大事にしろ（後書き）

以上です。ちなみになぜ吹寄を選んだかと言うと

ただ単純に俺が好きなのです。すいません

まあでも、なんやかんや言っ

当麻と一番仲のいい女子は御坂か吹寄だと思っています。

なんか、喧嘩が多いけど友達ってなんかよくね？と思ってます。

まあそんなこんなで気付けば14話もやっていたこの作品もこれで次回で最後です。もう新しい作品の構想も出来ているので

また近いうちに新しい作品も出します。

それもこれと同じコメディ系です。

ではまた今度。

楽しい学園祭と『俺達の戦いはこれからだ!!』 (前書き)

書きましたが、色々ゴタゴタしそうだったので  
一気に書き上げました。だから展開が変に早いです。  
また気になることがあれば書きなおします。  
そんな訳で最終回いきます。

楽しい学園祭と『俺達の戦いはこれからだ!!』

5日後……一端覧祭当日

「「「おかえりなさい!!あ・な・た!!!」」」  
「いや…あなたじゃねーし」

当麻に招待されいった部屋での御坂の第一声はそれだった。教室の部屋を開けるとそこにスタンバっていた白いドレスに身を包む少女達にそう言われれば

そのような事を言ってもなんら不思議ではないが、御坂は学園祭で仕方なく(多分)やっている彼女達に冷たく言い放ってしまった事を公開するよりも、

まずこのクラスは何をやっているのかを考える事に思考を回した。そんな御坂にクラスの3分の1ほど改造して作られた奥の方にあるキッチンらしき所から、

彼女の良く知る人物が声をかけてきた。

「よお!御坂、来たか!!」

「いや…来たかじゃなくて…なにこれ」

「見て分かんねえか?女の子の一生の憧れを叶える『ウエディング喫茶』だよ」

御坂が見渡すと先ほど声をかけてきた3人以外にもクラスの中には7人ほどの純白のドレスに身を包む少女達が接客に明け暮れていた。

「ちなみにドレスは舞花が作りました」

「一体誰のセンス？」

「仕方ねえだろ…ジャンケンであいつらが勝っちゃったんだから」

当麻が指を指す先には当麻と同じく3バカデルタフォースの残り2名である青髪に土御門がいた。

「ニャー！！ウエディング萌えええ！！！！」

「パシャっとな〜」

奥の方でなにやら情熱を持て余している二人を見つめながら、当麻と御坂の二人は同じような呆れた目で二人を見つめた。

「完璧に趣味ね…」

「違えよ…欲望だよ」

二人はまた暫くバカ二人組を見つめていたが、取りあえず当麻が誤解を解くように説明した。

「でも…女性陣は結構乗り気だったぞ…流石、舞花様だけあって、衣装は可愛く出来てる」

「まあ確かに動機はどうであれ…衣装はよく出来てるわね」

御坂は改め店員達が着る衣装に目をやった。彼女達が着ているドレスは本物の結婚式で使われてもおかしくないくらいの出来栄で、それでいて接客をしやすいように動きやすそうな印象を与える、まさに舞花さまさまなすこいドレスだった。

「おい！貴様ら何をしてる！！さっさと厨房へ戻れ！！」

自身の欲望をむき出しにしている青髪、土御門に吹寄がゲンコツを顔面、頭にぶち込み大人しくさせた。

「吹寄、お前は着ないのか？」

「別にいい…着たくないし…私は裏方で十分だ」

「なんでだ？似合いそうなのに…」

当麻の台詞に吹寄はピクツと反応すると即座に当麻に近づいて来て、先ほど青髪たちにもやったゲンコツ攻撃で当麻の頭に叩きつけた。

「いったあゝ」

「やかましい！！貴様もさっさと裏方へ回れ！！」

そっぴうと吹寄はどこか顔を赤くし教室から出ていった。

「へゝいっとな…まっそっぴう訊だ、招待しといてなんだが後は勝手にやってくれ」

「あつ、うん…」

先ほどの二人のやり取りになんだか疑問を持ちつつ御坂はテーブルへと案内する店員に従って黙って席に着いた。

~~~~~

教室の奥にある厨房では裏方を任された男達数名と女子が次々に来る注文に慌ただしく対応していた。

そんな中で当麻、青髪、土御門は厨房の隅でどんどん積み上げられる皿を黙々と洗っていた。すると段々退屈になったのか土御門が声をかけてきた。

「にゃー！カミちゃん！一体何をしたぜよ！？」

「何がだ？」

「何がやあらへん！吹寄の事や！！」

「だからなんだよ」

もう手を止めて話しかける二人をあしらうように当麻は皿を洗い続けた。

「なんか最近吹寄の態度おかしくあらへんか！？」

「どこがだよ？いつも通りだろ…さつきも殴られたし」

「にゃー！違うにゃー！！なんかうまく説明でないけど…なんつか…フハツとしてるにゃー！！」

「そうやー！！なんかこうフワフワしてるんや！！」

「いや抽象的すぎて分かんねえよ…」

訳のわからん事を言ってくる二人を適当にあしらい、皿洗いを続けていると

「上条君！お客さん！！」

~~~~~

「ようっ！上条当麻！！」

「先日はどうも」

「遊びに来ました！」

「建宮！神裂！五和！みんなも」

上条達のクラスに一度に7、8人で押し寄せたのはつい数日前にあった天草式であった。

「いやゝなんか面白い事やってるよな！」

「まあ…ほとんど趣味だが」

教室の中で働く女子生徒達を見ながら素直な感想を述べる建宮に若干の苦笑いを浮かべながら答えると

「でも可愛いですねウエディングドレスって」

と女の子らしい反応をする五和に

「なんなら五和着てみるか？」

「えっ！？」

「衣装ならまだ余ってるからな…それに今は色んな所でイベントやってるから人も少ないし」

「いいじゃないの！五和！！着せてもらえよ！！」

少し戸惑ってる五和に建宮はヒソツと耳打ちをした。

いいじゃないの五和！

でも…

これで上条が着替えた五和の隣に行けば、それはまるで結婚式なのよ

建宮がそこまで言うと五和は顔を真っ赤にし

「もーやだー建宮さんっ！ー！！」

バチンツ！とすごい音を立てて建宮を殴り飛ばした。

何人かの天草式は教皇代理ー！！と駆けよっているが殴った五和は無視して何時だか見た腰をクネクネとさせている。

「神裂、お前はいいのか？」

「いついえ！私は別に……」

急に話を振られ動揺する神裂であつたが、そんな神裂に先ほど殴り飛ばされた建宮が急に立ち上がると

「大丈夫です！女教皇！！あなたのウエディングドレス『墮天使エロメイド』はちゃんとここにあります！ー！！」

どこから出したのか分からないが、かつて当麻にドギツイ印象を与えたトンでも衣装を持って神裂に近づいてきた。

「余計な事をオオオ！ー！！！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「おお！なんか盛り上がってるな！」

そう言っただけらしい教室に入ってきたのは不良っぽいイメージを

与える浜面とジャージに身を包む滝壺であつた。

「よお浜面、滝壺」

「なんか随分と個性丸出しな喫茶店だな」

教室に大勢いるウエディングドレスの少女達を見ながら正直な感想を述べていると

「どうだ滝壺着てみるか？」

「いいの？」

興味ありげに見ていた滝壺に当麻が尋ねると滝壺はうつすらと笑みをもらし聞き返してきた。

「おう別にいいぜ、どうせならそのまま結婚式挙げてやるよ」

「なっ！？何言ってるんだ！？」

~~~~~

顔を真っ赤にする浜面をしばらくの間からかっていると

女子生徒に従ってついて行った滝壺が白いウエディングドレスを着て戻ってきた。

「はまづら…似合う？」

「おっ！おっ！ー！」

滝壺の質問に少し遅れて浜面が答えると

「よし、このまま結婚式でもやるか…」

「だからいいから！！そのノリ！！」

先ほど当麻がふざけて言ったことだが、浜面もいい加減腹が立ってきたのか

「そうか…そんなにやりたいならお前にもやってもらおう事があるぞ」  
「…なんだよ？」

「みなさん！！今から当麻君に盛り上げてもらう為に一曲歌ってもらいましょう！」

「はあ！？」

お客の数が減ってきたクラスでは暇なのか何だ何だと面白がって奥の厨房から出てくる者達もいた。

「いやいや待て！無理だから！！」

「では歌ってもらいましょう…上条当麻君で、曲は『ゼロからの逆襲』」

「……………なぜだ…歌える気がしてきた…」

浜面がどこからか持ってきた学園都市には珍しいカラオケセット（カセットVer）を持って当麻が歌いだそうとすると、

「パパーン！！」

突然、当麻のちょうど前にあったドアがガラガラつと勢いよく開けられ、一人の少女が入ってきた。

「えっ？」

「パパー！！私だよ！パパー！！み！・な！・つ！、美しい夏で美夏！」

少女は当麻に近づくとその手を握って上下に振り出した。

「いや…お前誰？」

「も…25年後から来たパパンの娘だよ！！」

当麻は暫く唖然として何も出来ないでいると、少女は辺りに目をやりクラスメイトや客が多いクラスの中で一人の少女を見ると

「きゃー！！ママン！！やだー！！ママンもピチピチじゃん！！！」

そう言いながら客の中にいて、何事かとこちらを見つめる御坂のもとに飛んでいき今度は御坂の手を握り出した。

「マツ！ママン！？」

「そう私はパパンとママンの子供だよ！！」

「そうだ！！」

少女は何かを思い出したかのように御坂の手を放し再び当麻の手を握って、当麻を無理やりそ外へと連れ出して行った。

「未来が大変なの！！パパンの力を貸して！！」

「いや！だから何が！？」

「こうしてる間にも奴らが私を追って来てるの！！」

「ねえ！！君聞いている！？」

周りにいたみんなも最初は茫然と立ち尽くしていたが、出ていく当麻達に少し遅れてそれについて行った。そして、学校に校庭に出る

と学校の校庭に突如現れた黒く巨大な空に浮かぶ船の様な形をした物体を見て、

「なあ……美夏……何アレ？」

「あれはネオローマ正教だよ……パパン……」

本当に何がなんだか分からないが、この様な事態になると大抵面倒な事になる事を当麻は悟っていたので深くため息をついていると、何故だか知らないが顔を赤くした御坂が当麻の隣に立った。

「ウホンッ！しつ仕方ないわね！！いくらあんたとの子供とは言え、私の子には変わりないんだから！」

言っておくけど!! あんたとの子供だから助ける訳じゃないんだからね!!」

「いやっ！知らねーよ！お前の戦う理由なんて！！」

当麻がツツコンでいると今度はその隣に天草式（武装済み）が立ち並んだ。

「よく分かりませんが……戦うしかないみたいですね……」

「いや！納得すんな！！なんでやる気満々マン！？」

当麻のツツコミも無視し皆はウオオオ！！と雄叫びをあげ謎の飛行物体へと走って行った。

「あゝもう！なんでみんな戦う気になってんの！？もう！不幸だアアアア！！！！！！！！！！」

俺達の戦いは終わらない!!

ご愛読ありがとうございました!!

楽しい学園祭と『俺達の戦いはこれからだ！』(後書き)

終わりましたが、なんだかな

やっぱり、書きたいことが他にもあると中々集中できません。

とりあえずジャンプの打ち切りっぽく終わらせてみました。

まあとりあえず、御愛読ありがとうございます！！

マルコの次回作に御期待下さい！！

なんだか前の話を最終回にしとけばよかった。

そんなこんなで終わりましたがまた近いうちに新しいのを出します。  
それは長いです。

てゆーか、ちよつとした小話をひたすらやっていくそんな感じです。  
ではまた今度。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5977n/>

---

とある未来の分岐点？

2010年10月12日10時14分発行